■研究発表論文

絵画にみる三保松原と富士山との関係の変遷と現代の風景認識に関する研究

Change of Relationship of Mount Fuji and Mihono-Matsubara in Paintings and Printings and Recognition of Landscape in modern times

大竹　芙実*　　山本　清龍**　　下村　彰男*

Fumi OTAKE　Kiyotatsu YAMAMOTO　Akio SHIMOMURA

Abstract: Mihono-Matsubara, which is located in Shizuoka Prefecture and faces Suruga Bay, was registered as a component of the World Cultural Heritage Site in 2013, because it has been closely related to Mount Fuji, sacred place and source of artistic inspiration. However, the change of the relationships between Mihono-Matsubara and Mount Fuji has not been made clear.

The purpose of this study is: 1) to clarify the change of relationship between Mount Fuji and Mihono-Matsubara through painting and printing analysis; 2) to capture the visitor's landscape recognition in modern times through questionnaire survey; 3) to consider the future direction of conservation and management of the cultural landscape at Mihono-Matsubara area.

As a result, the whole period from Muromachi era to modern times can be divided into four parts (faith period, composition period, human works period, theme period). In addition to this, it was suggested that the recognition of landscape of Mount Fuji and Mihono-Matsubara changed from what has the religious meaning to what placed more weight on the visual landscape. It is considered that the cultural landscape at Miho area should be managed based on such a change.

Keywords: *Mihono-Matsubara, Mount Fuji, cultural landscape, landscape recognition, landscape structure*
キーワード：三保松原，富士山，文化的景観，風景認識，景観構成

1．背景と目的

2013年，わが国の象徴である富士山が信仰の対象，芸術の源泉としてその価値が認められ世界遺産リストに記載された。その25番目の構成資産である三保松原は，富士山から40km以上離れているにもかかわらず，平安時代から書き記されてきた富士山と三保松原を表現した数々の絵画や和歌が，芸術の源泉，信仰の対象とされてきた富士山との関係が深いと評価され，構成資産として登録された[1)]。また，日本人の風景観，観光志向の変化とともに人々の関心が希薄化していた三保松原であるが，構成資産登録を機に訪れる観光客は急増した[2)]。しかし一方で，来訪者の急増は世界遺産登録によってきっかけを与えられたにすぎず，場所や風景が持つ価値，そしてその背後にある「意味」を訪れる者にどのように伝えるのか，単なる芸術論，遺産登録時の理論として価値を整理するだけなく，現代的価値意識との整合を図るなど，多面的な検討が必要である。現状では，三保松原と富士山の関係について時代的変遷をはじめ詳細な検討・整理はなされておらず，構成資産としての価値を伝え，保全を図るには，両者の関係性について明らかにする必要があると考える。

三保松原といえば，銭湯の壁を飾るわが国の代表的な美景として多くの日本人に親しまれてきたものであるが，その松原がいつ形成されたのかという点についてはいまだ不明である[3)]。三保が表現された最も古い文化作品としては，708年『万葉集』に登場した田口益人による和歌があげられており[4)]，富士山との密接な関係については御穂神社[5)]に古くから伝わる『三保大明神御縁起』内に，三保は富士が創り出した嶋であるとの記述が確認された[6)]。また，三保松原と富士山との関係についてその変遷を明らかにする資料としては，数多くの作品が残されている絵画が有用である。しかしながら，三保松原の絵画に関する既往研究としては，ある特定の絵画について富士山との関係を論じた文献[7)]はあるものの，過去から現代まで，その描かれ方や背景の変遷について整理したものは存在しない。

そこで，本研究では，風景における三保松原と富士山との関係の変遷について絵画分析を通して明らかにするとともに，現代における三保松原来訪者が富士山に向けた風景に対する認識を調査し，風景地としての今後の利用と保全管理の方向性について考察することを目的とした。

2．研究方法

（1）研究対象地

研究対象地である三保松原は富士山頂の南西約45kmに位置し，駿河湾にのぞむ豊かな松林に覆われた砂嘴である。砂嘴は約7kmに及び，その上に約5万本のクロマツが約4.5kmにわたって叢生している[8)]。また，富士山を遠景に海，砂浜，松林を一度に眺めることができ，古くから白砂青松の地として人々に親しまれ，1922年には日本初の名勝として指定された。さらに，2013年には世界文化遺産富士山の構成資産として世界遺産リストに登録されている。また前述の通り，これまで多くの絵画や文学の題材として富士山とともに表現されてきた。

（2）調査方法

1）絵画分析

三保松原と富士山の関係の変遷を明らかにするため，三保松原および富士山が描かれている絵画の収集，分析を行った。収集した絵画は，まず，富士山や三保松原に関する静岡県内地方出版物（静岡県立美術館，富士山科学研究所等より収集）8冊を対象にその中で「三保松原」の絵画として掲載されているものを，次に，インターネットにおいて「三保」というキーワードで検索しタイトルに「三保松原」を含む富士山が描かれているものを集めた[9)]。さらに，それら作品中から時代がある程度特定できる室町時代から現代までの絵画60点を分析対象として選定した（表－1）。抽出した作品については時系列順に並べ，詳細な制作年が不明なものについては，文献に「○世紀前半」と記載があった場合その世紀の最初に，「江戸－明治時代」，「18－19世紀」のように次の時

*東京大学大学院農学生命科学研究科　　**岩手大学農学部

表−1　分析対象とした絵画一覧

						その他構成要素								富士と松の間の人工物		要素の位置					
						信仰		人為			自然										
作品数	作者名	作品名	制作時代	制作年(西暦)	引用元	寺院	天女	人	家	舟	海	雲	砂浜	有	(要素)	富士山	松林	寺院	人	家	舟
6	仲安真康	富嶽図	室町時代	15世紀	⑤	○		○	○	○	○	○	○	○	寺院, 家, 人, 舟	2	7,8	4	4	4	6,7,8,9
	不明	「婦教訓」三保浦富士山之景	室町時代	16世紀	③			○		○	○	○				1	7		9		7,8
	不明	富士三保松原図屏風	室町時代	16世紀	⑤	○		○	○		○	○				3	8	7	7	7	
	不明	富士三保松原・天橋立図屏風	室町時代	16世紀	⑤	○			○		○	○				1	5,6,8,9	8	4,7,8,9	3,4,7	3,4,9
	不明	東海道往来図屏風	室町時代	16世紀	④	○		○	○	○	○	○	○	○	人, 舟	1	6	4,7	4,5,7,8,9	8,9	4,5
	狩野元信(印)	絹本著色富士曼荼羅図	室町時代	16世紀	①	○		○		○	○	○	○	○	寺院, 人, 舟	2	8	5,7	2,5,7,8,9		7,8,9
18	伝雪舟	富士三保清見寺図	室町時代	16世紀	⑥	○					○	○				1,2	9	7			
	不明	三保松原・厳島図屏風	江戸時代	17世紀	②			○	○	○	○	○	○			2	7,8		7	1,4,7	7,8,9
	不明	「駿河土産」 清水湊	江戸時代	17世紀	③						○	○	○			1,2,4,5	9				
	狩野山雪	富士三保松原図屏風	江戸時代	17世紀	②	○					○	○				1	9	7		7	
	狩野探幽	富士三保清見寺図	江戸時代	17世紀	③	○			○		○	○	○			2,5	9	7		7	
	狩野探幽	富士山図	江戸時代	17世紀(1667年)	②				○		○	○				2	9				
	狩野常信	富嶽三保松原図	江戸時代	18世紀(1704−1709年)	②	○		○			○	○	○			2	9	4	9		
	山本探川	富士清見寺図	江戸時代	18世紀	⑤	○			○		○	○	○			2	9	7		8	
	曾我蕭白	富士三保図屏風	江戸時代	18世紀	⑥					○	○	○				1,4	9				8
	円山応挙	富士山図屏風	江戸時代	18世紀	③							○				3	6				
	円山応挙	富士三保松原図屏風	江戸時代	18世紀(1784年)	⑤							○				4	8,9				
	原在正	「富士山図巻」第七巻 駿洲久能寺在観音堂臨眺芙蓉及び三保崎	江戸時代	18世紀(1796年)	④						○	○				2	9				
	司馬江漢	駿河湾富士遠望図	江戸時代	18世紀(1799年)	②					○	○	○				4,5	9				6
	淵上旭江	「山水奇観」駿河観音山	江戸時代	18−19世紀	⑦	○				○	○		○			1	6,9	8			6,7
	歌川豊国(代不明)	東海道五十三次　中之郷	江戸時代	18−19世紀	③			○		○	○					1,2	6		5,8,9		3
	松村景文	富嶽図	江戸時代	19世紀前半	②						○	○				1	8,9				
	司馬江漢	駿州薩陀山富士遠望図	江戸時代	19世紀(1804年)	②				○	○	○	○	○			5	4,5,7			7	6
	原在中	富士三保松原図	江戸時代	19世紀(1822年)	②						○	○				1,4	8,9				
18	歌川広重	東海道五十三対江尻	江戸時代	19世紀(1844−1847年)	③		○			○	○			○	舟	4,7	7,9				7
	不明	江戸城　本丸御殿　中奥・休息の間・上段の間	江戸時代	19世紀	③	○		○	○	○	○	○	○			2,5	9	4	7	7	7
	不明	東海道五十三次図屏風	江戸時代	19世紀	③			○	○		○	○	○	○	家	3	5		1−7	1−7	
	歌川豊国(二代目)	「名勝八景」 三保落雁	江戸時代	19世紀	⑨	○		○	○	○	○	○	○	○	舟	1,2	5,6	4	7	7,8,9	4,5,6,8,9
	狩野永岳	富士三保松原図	江戸時代	19世紀	⑨				○	○	○	○	○	○	舟	1,4,5	9			8	9
	歌川芳虎	足利義満帰陣之図	江戸時代	19世紀	③			○			○		○			2	6		7,8,9		
	歌川広重	「六十余州名所図会」 駿河 三保のまつ原	江戸時代	19世紀(1853−1856年)	③					○	○	○	○	○	舟	1,2	7,8,9				4,5,6,7
	歌川広重・歌川豊国(三代目)	双筆五十三次江尻	江戸時代	19世紀(1854年)	③		○			○	○	○		○	舟	8,9	7,8,9				8,9
	歌川広重	「五十三次名所図会」 江尻　田子の浦　三保の松原	江戸時代	19世紀(1855年)	⑨					○	○	○	○	○	舟	1,2	5,6				4,5,6
	歌川広重	「富士三十六景」 駿河三保の松原	江戸時代	19世紀(1859年)	⑤					○	○		○	○	舟	1,2,3,4,	7,8,9				4,5,6,7
	橋本玉蘭(歌川貞秀)	富士詣独案内	江戸時代	19世紀(1859年)	⑤					○	○		○	○	舟	2	7,8				7,8
	五雲亭貞秀	東海道薩蛇峠之景	江戸時代	19世紀(1862年)	③			○			○					1	6		5−9		
	五雲亭貞秀	東海道興津駅勝景	江戸時代	19世紀(1863年)	③	○		○	○		○					1	5	6	7,8,9	6	
	一英斎芳艶	東海道名所風景　清見寺	江戸時代	19世紀(1863年)	③	○		○		○	○			○	舟	1,4	4	6	5		4
	一蘭斎国綱	東海道名所風景　久能山	江戸時代	19世紀(1863年)	③	○				○	○	○	○	○	舟	6	6,9	4			5,6,8
	歌川芳虎	東海道名所図会	江戸−明治時代	19世紀(1864年)	⑤			○	○	○	○		○	○	人, 舟, 家	1	8		7	1−9	5,6
	一猛齋芳虎	三保明神エ軍祈ル勝利図	江戸−明治時代	19世紀	③			○	○	○	○					1	3		4,5,7,8	9	1,2
	月岡芳年	羽衣図	明治時代	19世紀	③		○					○				9	7,8				
13	五姓田義松	富士	明治時代	20世紀(1905年)	②						○	○				4,5	6,9				
	横山大観	富士・三保図	明治時代	20世紀(1910年)	③							○				3,6	7,8				
	和田英作	朝陽富士	大正時代	20世紀(1917年)	③						○	○	○			2,5	4,6,7				
	下村観山	三保富士	大正時代	20世紀(1919年)	⑤					○		○	○	○	舟	1	6,9				5
	岡田三郎助	富士山(三保にて)	大正時代	20世紀(1920年)	③						○	○	○			2,4,5	4,7,8				
	池田遙邨	「昭和東海道五十三次」江尻　三保松原	昭和時代	20世紀(1931年)	④			○			○		○			4	5,7,8		9		
	川北霞峰	富士三保松原	昭和時代	20世紀	③							○				3,6,9	4,5,7,8				
	和田英作	三保富士	昭和時代	20世紀(1953年)	⑨						○	○	○			4,6	1,2,4,5				
	和田英作	富士(三保より)	昭和時代	20世紀(1953年)	⑨						○		○			1,2	7				
	小山硬	三保の富士	現代	20世紀(1989年)	⑧						○		○			2	1,4,5				
	横山大観	三保の富士	現代	20世紀	⑨						○	○	○			2	7,8,9				
	横山大観	三保の不二山	現代	20世紀	⑨						○	○	○			2,3	7,8,9				
	横山大観	三保の富士	現代	20世紀	⑨							○	○			1	6,7,8,9				

※引用元文献　①「富士山：信仰と芸術の源」, ②「富士山の絵画」, ③「三保の松原・美の世界」, ④「描かれた東海道 = History of Paintings on Tokaido」, ⑤「日本の心富士の美展」, ⑥「細川コレクション日本画の精華：大観・春草・古径らの代表作と桃山・江戸時代の名品」, ⑦「壊れゆく景観−消えてゆく日本の名所」, ⑧「富士山」, ⑨インターネット

代にまたいでいるものに関してはその世紀の最後に，「○世紀」のみしか明らかでないものはその世紀の中間に位置付け，さらにそれらを作者の没年で昇順に並べるようにした。研究の対象期間は，収集できた最も古い絵画が描かれた室町時代（15 世紀）から現代までである。

また絵画分析に関しては，三保松原と富士山，両者の位置関係とともにその他描かれる構成要素の抽出，両者の間に描かれる要素，主要要素が描かれる位置について読み取り，それらの時代的傾向を検討した。抽出する要素の対象としては，富士山信仰との関連から寺院と天女を，人為的要素として人，家，舟を，自然的要素では富士山，松林以外の海，雲，砂浜を対象とした。描画位置については，絵画を縦横均等に 3 分割（左・中・右×上・中・下），計 9 つのブロックに区切り，左上から順に 1～9 の番号を割り当て，それぞれの要素が描かれている位置を記録した。描画位置の分析にあたっては，富士山，松林のほか抽出した要素の中からとくに特徴が表れた寺院，人，家，舟を分析対象とした。

2）アンケート調査

また，世界遺産の登録に際して評価された富士山およびその構成資産としての三保松原の価値が「信仰の対象と芸術の源泉」であるのに対し，現代の三保松原来訪者がどのように認識しているのかを把握するためアンケート調査を実施した。

調査日時は多くの来訪者が予想された 2015 年 7 月 18（土）～20 日（月祝）の連続 3 日間であり，三保松原の羽衣の松付近の砂浜において 18 歳以上の来訪者を無作為に抽出し，調査への協力依頼に対して同意を得た者に面接式のアンケート調査を実施した。調査票は，来訪者の基本属性と旅行特性を把握する項目，三保松原に関する来訪者の意識と富士山を望む風景の価値認識の把握を意図した項目を設け調査票を構成し，日本人の中で育まれてきた認識を把握することを目的としたため，調査対象は日本人のみとした。なお，三保松原から富士山を望む風景に対する認識を把握するにあたっては，風景の印象を世界遺産登録に際して示された 2 つの評価軸について 5 点満点で評価してもらい，さらにその理由についても自由回答で求めた。世界遺産登録において示された芸術面と信仰面の価値は，風景鑑賞に際して，視覚的側面である実景自身が有する価値と，実景が象徴する意味に関する価値であると理解される。したがって三保への来訪者が松原と富士を望む風景を見た際に，この両者の価値を，各々どの程度認識しているかを問うことになり，それらを分かり易く伝えるために，実景に対する価値を「美しさ」，そして信仰面での意味に関する価値については「神聖さ」という表現を用いて調査することとした。

3．結果と考察

（1）三保松原と富士山との関係の変遷

絵画に描かれた諸要素と，それらの位置関係および描かれた位置について整理，分析を行うとともに，三保松原と富士山の関係，つまり各々に対する認識と両者の繋がりについて考察した。その結果，時代による傾向がみられ，それら各時代の特徴と絵画が描かれた時代的背景をもとに，室町時代から現代までを 4 期に区分した。（表－2，図－1）。

1）第 1 期（15～16 世紀）

まず，第 1 期は富士信仰を表す寺院とその他人為的要素が多く描かれている点が特徴の一つである。そして位置分析をみると，富士山が上部左奥・中央に描かれていたことがわかり，三保松原が手前に，そしてその間に寺院や人為的要素が描かれる傾向がみられた。

三保松原と富士山の両方が描かれた絵画として最古のものは，室町時代に仲安真康によって描かれた『富嶽図』であり，富士山を遠景として手前に三保松原を描くという構図は，この時代より描かれ始めた。また，この時代の絵画には舟や人が描かれているが，これは「絵解き」の用具として使用するためであった[10]。俗世界の様子や登拝者を描くことで一般庶民にも親近感を持たせ，富士登拝を勧めようとする意図が含まれていたとされている。この時期の絵画では富士山と三保松原の間に海や雲が描かれており，それらが信仰（聖）域と生活（俗）域との境界を表現していると考えられた。また，興味深い傾向としては，この期の半数以上の絵画において富士山は三又山頂として描かれている。その三又山頂に三体の仏が描かれている作品もあるなど，これらは富士山が信仰の対象として位置づけられていたことを示していると言える。

このように，富士山は古くから神々の住む場所，聖なる霊山として広く人々の信仰の対象と位置づけられてきたが，その富士信仰が衆庶の間に浸透し，富士登拝が行われるようになったのがこの時代であった[11]。そのような社会的背景のもと，誕生したのが『富士参詣曼荼羅図』であり，世界遺産推薦書においても富士山と三保松原の信仰の関わりを示す重要な絵画であるとされている[12]。信仰の対象としての富士山を上部に，中部には信仰の拠点である浅間大社，そして下部に三保松原が描かれたこの景観構造は，その後数多の参詣図・登山案内図にも明示され，多くの庶民を登拝・巡礼へと誘導させた[13]。このような絵画で手前に描かれている三保松原は，俗界を示す範囲に描かれ，当時の日本人は三保松原を富士山への登拝の過程を表す重要な霊地として認識しており，聖域である巡礼路への入り口，架け橋となる存在であった[14]。つまり，この時代に共通した認識として，三保松原と富士山との関係は，聖域と俗界との境界，出入口としての関係であったと考えられる。

2）第 2 期（16～19 世紀）

第 2 期では，富士山と三保松原の間に一切の人為的要素が描かれなくなったことが特徴的である。構図では，富士山は変わらず左奥に，松原は 8 割近くの絵画で右手前に描かれる傾向がみられた。また，第 1 期と比べ，全体的に人為的な要素，とくに人，舟

表－2　構成要素の位置分析

第1期（N=6）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
富士山	50.0%	33.3%	16.7%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
松林	0%	0%	0%	0%	16.7%	33.3%	33.3%	66.7%	16.7%
寺院	0%	0%	0%	33.3%	16.7%	0%	50.0%	16.7%	0%
人	0%	16.7%	0.0%	50.0%	33.3%	0%	66.7%	50.0%	66.7%
家	0%	0%	16.7%	33.3%	0%	0%	33.3%	16.7%	16.7%
舟	0%	0%	16.7%	33.3%	16.7%	16.7%	50.0%	50.0%	50.0%

第2期（N=18）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
富士山	44.4%	50.0%	5.6%	27.8%	22.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
松林	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	5.6%	16.7%	11.1%	22.2%	77.8%
寺院	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	22.2%	5.6%	0.0%
人	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	5.6%	5.6%	11.1%
家	5.6%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	22.2%	5.6%	0.0%
舟	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	16.7%	11.1%	16.7%	5.6%

第3期（N=18）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
富士山	55.6%	38.9%	11.1%	22.2%	11.1%	5.6%	5.6%	5.6%	11.1%
松林	0.0%	0.0%	5.6%	5.6%	22.2%	27.8%	33.3%	33.3%	38.9%
寺院	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%
人	5.6%	5.6%	5.6%	11.1%	22.2%	11.1%	44.4%	22.2%	16.7%
家	11.1%	11.1%	11.1%	11.1%	11.1%	16.7%	22.2%	16.7%	16.7%
舟	5.6%	5.6%	0.0%	27.8%	33.3%	33.3%	27.8%	22.2%	16.7%

第4期（N=13）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
富士山	22.2%	61.1%	16.7%	33.3%	22.2%	27.8%	0%	0%	5.6%
松林	16.7%	5.6%	0%	55.6%	38.9%	22.2%	61.1%	38.9%	27.8%
寺院	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
人	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5.6%
家	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
舟	0%	0%	0%	0%	5.6%	0%	0%	0%	0%

※30%以上を網掛け，15%以上30%未満を下線で示した。

第１期：狩野元信
『絹本著色富士曼荼羅図』

第２期：伝雪舟『富士三保清見寺』

第３期：歌川広重
『富士三十六景』《駿河三保之松原》

第４期：岡田三郎助
『富士山（三保にて）』

図－1　各期を代表する絵画

が描かれることが非常に少なくなり，富士山と松原のみの構図（41%）と，両者に加えて寺院が一定の構図で配される絵画（33%）に二大別される傾向がみられた。位置分析では寺院の割合は左手前に22.2%ととりわけ高い数値ではないが，定型的な構図の中で寺院が描かれており，この時代を特徴づけるものとしては大事な要素と言ってよいと考えられる。

室町時代から江戸時代にかけて，富士山の絵は数多く描かれたが，その中でも非常に重要な地位を持っていたのが雪舟の『富士三保清見寺』である[15]。水墨画の最高権威者の富士山図ということで，江戸時代には描き方の一つの規範として尊重され，左奥に富士山，左手前に清見寺，右手前に三保松原を描くこの構図は近世以降，多くの画家たちに模写され続け，富士図の定番として伝えられていった[16][17]。このことから，雪舟の絵画が時代を分ける大きな節目の作品であるとし，信仰心を絵画に表現することが主流であった時代から，第2期のはじまりとなる作品であると考察した。

つまり，この時期は実景（実際の風景）が意識され，絵画にも写実性が入り始めた時代と考えられる。『富士参詣曼荼羅図』に代表される第1期は富士登拝に関する「意味」を絵画によって伝えることが目的であり，そのため富士山は簡略化され，実際よりも急峻で左右対称に成形された円錐状に描かれていた[18]。一方で，この第2期の絵画は富士山そのものが写実的に描かれるようになったことに加え，富士，清見寺，三保松原の景観要素の配置や基本的な地形の特徴も表現されており，単に複数の景物を合成したものではなく，ある程度の地理的な事実の理解を前提として生まれたものとされている[19]。その影響からか，構成要素から寺院以外の人的要素が少なくなり，とくに富士山と三保松原の間に人工物が描かれなくなっていることから，絵画に描かれる富士山と三保松原の関係に変化が生じたと考えられる。以前は両者の間に人為を配置することで富士山を神々しくも親しい存在として描いていた時代から，人為を排除することで恐れ多く崇高な信仰の対象へと富士山の表現形は変化したと言えるのではないか。信仰対象としての富士山に対する認識が変化するとともに，実景における構図を構成する要素としての認識も加わり，富士山と三保松原との関係は変わっていったと考えられる。

3）第3期（19世紀）

第3期では，雪舟らをはじめとするこれまでの作品をいまだ踏襲している構図配置がやや見られたが，人為的要素が各所に数多く描かれ人々の労働や生活とともに表現されている点を特徴とする新たな時代が始まったと考察された。とりわけ，巡礼路とされていた富士と三保松原をつなぐ直線上に舟が多数描かれるようになり，一つの作品内に何隻もの舟が描かれている様子は，人々の生活感を感じさせる今までにない描写である。つまり，ここで描かれている富士山は，信仰対象としての崇高な富士というよりも，生活実感の中の富士と位置づけられると指摘されている[20]。そしてこの時代の三保松原は名勝の地，羽衣伝説の地として東海道をゆく人々に人気を博し[21]，富士山とともに数々の絵画に描かれていくこととなった。有名な浮世絵のほか，作品名に「名勝」とつく絵画，天女が描かれた絵画があることからもそのことがうかがい知れる。この期の代表作は歌川広重の『富士三十六景』《駿河三保之松原》であり，この作品はゴッホやモネ等の海外の著名な芸術家たちにも影響を与えた[22]。この期に連作が多いのは，富士を様々な見せ方で描き，江戸庶民を楽しませようとした背景が存在する[23]。

19世紀に入ると，富士山は信仰の対象としても身近な存在へと変化したと考えられる。その背景には，食行身禄の教えを広めるため，弟子たちの参詣登山を目的とする組織である富士講を次々とつくったことがある。その影響から，富士山はこれまでになく多数の参詣登山者で賑わうようになった[24][25]。また，この時代は人々の中に真実をこの目で確かめたいという実証主義的な精神が高まった時期でもある。その欲求は風景にも及び，一般人の旅行が比較的自由になってきたことも相まって，各地の風景とくに奇勝と言われる場所を旅する者が増えていった[26]。加えて，版画という視覚メディアが大衆にも親しまれるようになり，その風景を実際に見たいという欲求をさらに助長させていったのである[27]。

以上のような，富士山登拝の大衆化，実証主義的精神の高揚，視覚メディアの流布により，富士山はイメージの山から現実の山へと変化していった[28]。一方で三保松原は地域の名勝地として位置づけられ，風景が生活の舞台として認識される中で，地域の名勝地としての三保松原と，背景としての富士山との両者の意味のつながりは希薄化し，生活の場における重要な構成要素として位置づけられていたと考えられる。

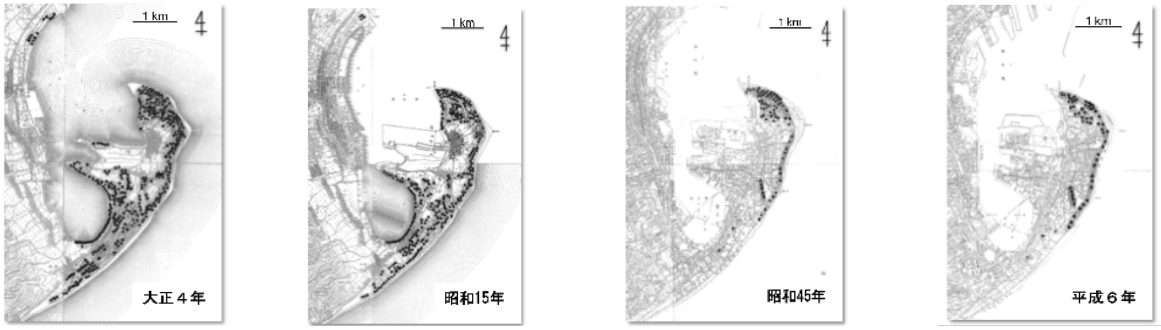
4）第4期（20世紀以降）

20世紀に入ると，富士山との信仰的つながりを示す寺院や天女が描かれなくなり，その他人為的要素もほぼ表現されなくなって，一つの時期を形成すると考えられる。描画される構成要素が再び自然物のみとなり，構図としては富士山が中央からやや左奥に，そして三保松原はそのさらに左側に描かれる傾向がみられる。

また，描かれ方もさらに写実性を増し，実景としての風景描写を追求した作品が主流となっている。ここでの富士の役割は，日本の象徴，美しく雄大な山としての存在感であり，三保松原もまた，日本人に古くから親しまれている植物として描かれ，富士山と海との美しいコントラストを生み出している。この時代の作品にはもはや信仰の対象としての「意味」は含まれていないと考えられ，風景が鑑賞の対象として認識される時代と言って良い。

このように風景の背後にある「意味」に対する認識が希薄化した要因としては，西洋の風景観の流入による自然科学的な見方の獲得が大きく影響していることが指摘されている[29]。日本の象徴である富士山と松，そして海岸との取り合わせによる白砂青松の雄大かつ繊細な自然風景に美を見出し，それを絵画に表現したのがこの時代である。芸術において個性が求められ，伝統的な構図から離れようとした背景も影響している[30]と考えられる。

そしてもう一つの大きな特徴として，視点場の変化が挙げられる。これまでの時代は富士山に対して右側に松原が描かれていた



図－2　三保半島と松林（国土地理院２万分の１地形図に加筆，針葉樹林記号を黒点でマーク）

が，20 世紀以降現代の絵画では松原が左側に描かれるように変化がみられた。これは昭和中期における港湾およびその周辺の大規模な開発と松林の大幅な減少が要因であると考えられる。三保半島一体の土地利用の変化を『清水市史』[31)32)33)]，および地形図（駒越，興津地区の国土地理院２万５千分の１地形図（大正４年，昭和 15 年，昭和 45 年，平成６年，平成７年））から分析したところ，最も古い大正４年と昭和 15 年までの地形図では三保半島の大部分が松で覆われていることが見て取れる（図－2）。しかしその後の昭和 45 年の地形図では半島の内側から松林が消滅し，残るのは駿河湾沿いのわずかとなってしまった。これは昭和前期の著しい港湾開発と観光地化，宅地化によるものであり，その面積変化を数値で見てみると，名勝指定時の大正 11（1922）年当時の松林面積は 339.8ha，松の本数は９万３千本であった。しかしその後，戦時中の松根油の採取を目的とした松林の伐採や戦後の民有地開発などにより，平成3(1991)年には，松林面積198.2ha，本数５万４千本に減少したとの記録がある[34)]。つまり，以前は半島全体が松林で覆われていたため，三保松原全体を一つの構成要素として捉えることができていたが，半島の内側から松が消失したことにより三保松原と富士山の双方を俯瞰景として描こうとすると，人工物が視点場に入り込んでしまうようになった。したがって，自然景として描くためには三保半島の外側に位置する現在の三保松原を視点場として，富士山の左側に松原を描く現代の構図で絵描かざるをえなくなったと言えよう。そして，そのことが富士山と白砂青松のみを要素とする絵画を生むことになり，日本を象徴する画題として位置づけられるようになったのではないか。

（２）現代の来訪者における三保松原からの風景価値

現代の人々が三保松原からの風景をいかに認識しているのかについて，現地でのアンケート調査を行った。調査では 252 人の有効回答があり，調査協力依頼時の有効回答率は 93.7%だった。このデータをもとに，現代の三保松原来訪者が三保松原から富士山を望む風景を，実景としての「美しさ」，その意味として内包する「神聖さ」という評価軸を，いかに認識しているのかについて分析した（表－3）。

表－3 は，各評価軸の評価点平均値と評価理由に関する自由回答を内容別に区分して示したものである。「美しさ」「神聖さ」の評価点平均値は，それぞれ 4.62，3.63 と共に３以上の肯定的な評価だった。認識された風景要素は，富士山，松，海があり，それらが一体となって美しいコントラストを生み出していると評価されていたこと，富士山を遠景とする構図も風景評価に寄与していることが要因としてあげられた。しかし，「神聖さ」に関しては「感じない」「わからない」と答えた来訪者が多かったこと，評価点が「美しさ」に比べ有意に低かった（t 検定，P<.01）ことから，三保松原と富士山との間にある信仰面でのつながりへの理解は来訪者の間で不十分である可能性が示唆された。

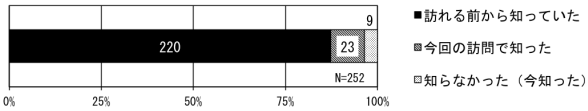
今回の調査は「神聖さ」を感じるかどうかを尋ねたものであり，富士山との信仰面での関係についての理解を直接的に把握できたとは言えない。しかし，高評価の理由として富士山そのものの神々しさや周辺の寺院の存在だけをあげた回答が多く，その点からも，三保松原と富士山との間にある文化的背景については認識されていないことがうかがえた。一方で，そのような富士山へ感じる信仰心や構図に対する感受性は多くの芸術家たちが絵画に表現しきたものでもあり，古くから日本人の間に共有されてきた部分があるのではないかということも示唆された。

表－3　三保松原の風景評価とその理由

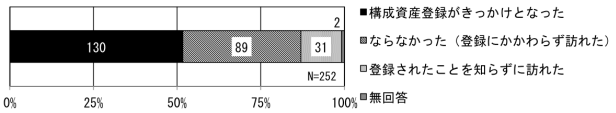
「美しさ」評価理由（評価点平均値：4.62）	
■景観調和性	
色・コントラスト	46
一体感・コラボレーション・調和	39
一度に見られること（富士山・松・海などが）	33
■景観構造	
構図・バランス・配置	33
富士山の形	14
海の向こう側に富士山が見える	11
立地・視点・距離	6
人工物・建物がない	5
さえぎるものがない	4
富士山の裾野まで見える	3

「神聖さ」評価理由（評価点平均値：3.63）	
■景観調和性	
色・コントラスト	4
■景観構造	
富士山の形・大きさ	10
構図・バランス	4
雲によりいろいろな見え方がある・見え隠れ	3
■景観要素の神聖性	
富士山の神々しさ・富士山への信仰心	27
富士山＝日本の象徴・日本一高い山	11
■風景の神聖性	
御穂神社・神の道・羽衣伝説	21
小さい頃からのイメージ・言われてきた	3
■否定的な意見	
神聖さは感じない・神聖とは違うと思う	49
「神聖さ」がよくわからない	13
身近だから・普段から見ているから	4
消波ブロック・ゴミ	3

注）N=252



図－3　世界遺産構成資産への登録の認知度



図－4　来訪のきっかけと世界遺産登録

また，来訪者の世界遺産構成資産登録の認知度は，訪れる前から知っていたと回答した人が 87%（220 人）と大半を占め（図－3），そのうち，構成資産登録が今回の来訪のきっかけとなったという人は 59%（130 人）と過半数であった（図－4）。つまり，世界遺産構成資産であることは多くの人に認知されており，その風景を見ることが多くの来訪者の目的となっているにもかかわらず，その風景の背後にある富士山との文化的な関係性や，世界文化遺産としての価値は来訪者に十分理解されているとは言いがたく，三保松原の本質的な富士山との関係を適切に伝えていく必要性が示唆された。

４．まとめ

本研究においては，室町時代以降の絵画分析を通して，三保松原と富士山の関係は大きく４つの時期に区分することができ，そ

れぞれを名付けるとすれば「信仰」時代，「構図」時代，「営み」時代，「主題」時代，とも言うべき変遷を経てきたと考察される。信仰や生活に関わる意味を象徴する風景認識と，あるがままの真景である視覚的な風景認識とが，各時代の社会状況に応じて比重を変えながら捉えられてきたことが示された。そして，富士は信仰の対象から鑑賞の対象へ，松原は富士登拝の過程における俗界からの出入口から富士山との取り合わせを生み出す重要な風景要素へと位置づけが変化してきており，両者の関係については，信仰面でのつながりが表されていた時代から，次第に信仰面での関係性は希薄化し，構図としての関係，そして日本を象徴する画題としての二大要素としての関係へと変化してきたことが示唆された。ただし本研究では，室町時代から現代までの約 700 年間を対象としているが，分析した絵画は 60 点で十分な作品数とは言い難く，あくまでも仮説としての提唱にはなるが，今後の三保松原の世界遺産としてのあり方を考える上で，これまでの富士山との関係を整理しておくことは必要であると考えられる。

また，アンケート調査の結果から，世界文化遺産としての価値，とくに信仰と富士山との関係性の理解が現代の来訪者の間で不十分であることが示唆された。世界遺産委員会の審査決議内には，管理及び保護の要請事項の一つとして，「構成資産のひとつひとつが資産全体の一部として，山の上方及び下方（山麓）における巡礼路全体の一部として，認知・理解され得るかについて知らせるための情報提供戦略を策定すること」という記述[35]があることからも，来訪者の文化的側面での価値の理解は今後の大きな課題である。したがって，現代の来訪者の限られた滞在時間[36]のなかで，いかにして世界文化遺産富士山の構成資産としての風景の背後にある「意味」を伝えていくか，来訪者への関与の仕方，風景価値の学びの体系化などが必要と考えられた。

また，前述の通り，三保松原が存在する三保半島は開発により多くの松林を失ったが，残された駿河湾沿いの松林に関しても，現在松枯れ等による植生の後退が大きな問題となっている。加えて，海岸侵食による砂浜の減少も指摘されており[37]，三保松原を保全・回復していくことも重要課題であると考えられる。

また，現在の富士山を眺める視点は三保松原の砂浜上が中心であるが，描かれてきた絵画の構図では，三保松原は視対象の一つであり，旧来の視点場は別の場所にあったと言える。富士山と三保松原の関係を伝える上で，かつての視点場に関する情報提供ないしは視点場そのものの復活も重要な課題と考えられる。しかしながら，その視点場については未だしっかりとは把握されておらず，富士と三保松原が構成する文化的景観の価値をまもり，伝えていく上で，旧来の視点場の特定，取り扱いの検討が必要であると考えられる。また，かつての視点場からの風景が象徴する両者の関係が理解できる良好な新たな視点場の創出も一方策と考えられ，これら視点場の多様化を通して，滞留時間を長くするとともに，より充実した情報の提供を促す検討が必要と考えられる。

以上のように，文化的景観としての風景管理を行う上での具体的な課題としては，視点場の変化の把握とそこからの眺望を取り戻すこと，三保松原の松林と砂浜の保全を行う必要が示唆された。

本研究では，絵画の中の富士山と三保松原の関係の変化，そして近代における土地利用の変化や現代の来訪者の風景認識を把握した上で，今後の三保松原の自然風景地，世界遺産観光地としてのあり方について考察を行った。しかしながら，三保松原と富士山との関係について，その全体像は把握できておらず，限られた数の絵画から読み取ったものである。三保松原と富士山との文化的関係性を示す資料は和歌等ほかにも存在し，そのような資料についても検討する必要がある。加えて，現代の来訪者の風景認識についても今回は風景認識について把握したに過ぎず，富士山との文化的つながりの理解についてはさらに踏み込んだ調査をする必要があると考えられ，それについては今後の研究課題としたい。

補注及び引用文献

1）日本国（2012）：世界遺産一覧表への記載推薦書― 富士山― ，33pp
2）朝日新聞（2013）：三保松原 人気急上昇，2013. 7. 12
3）川村晃生・浅見和彦（2006）：壊れゆく景観：慶應義塾大学出版，p18
4）川村晃生・浅見和彦（2006）：壊れゆく景観：慶應義塾大学出版，p18
5）三保松原が存在する三保半島内に存在する神社
6）遠藤まゆみ（2014）：三保の松原・美の世界：NPO 法人三保の松原・羽衣村，23-24
7）たとえば，成瀬不二雄（2005）：富士山の絵画史：中央公論美術出版，253pp.
8）日本国（2012）：世界遺産一覧表への記載推薦書― 富士山― ，p33
9）検索エンジン：「Yahoo! JAPAN」，検索年月日：2016. 7. 8
10）平野榮次［ほか］（2004）：富士信仰と富士講：岩田書院，p52
11）蔵敏則（2009）：富士山― 信仰と芸術の源― （美術における富士山，高階秀爾編）：小学館，p83
12）日本国（2013）：世界遺産一覧表への記載推薦書― 富士山― 追加情報 2，24-39
13）平野榮次［ほか］（2004）：富士信仰と富士講：岩田書院，49-52
14）日本国（2013）：世界遺産一覧表への記載推薦書― 富士山― 追加情報 2，24-39
15）上垣外憲一（2009）：富士山― 聖と美の山― ：中公新書，100pp.
16）上垣外憲一（2009）：富士山― 聖と美の山― ：中公新書，101pp.
17）高階秀爾［ほか］（2013）：富士山（日本絵画にみる富士，河野元昭）：美術年鑑社，p17
18）鳥居和之・名古屋市博物館［ほか］（1998）：日本の心富士の美展：NHK 名古屋放送局，219pp.
19）細川コレクション日本画の精華展実行委員会（1992）：細川コレクション日本画の精華― 大観・春草・古径らの代表作と桃山・江戸時代の名品― ：静岡県立美術館，p18
20）蔵敏則（2009）：富士山― 信仰と芸術の源― （生活文化における富士山，田中優子編）：小学館，225-227
21）遠藤まゆみ（2014）：三保の松原・美の世界：NPO 法人三保の松原・羽衣村，p53
22）日本国（2012）：世界遺産一覧表への記載推薦書― 富士山― ，p53
23）鳥居和之・名古屋市博物館［ほか］（1998）：日本の心富士の美展(描かれた富士，山下善也編）：NHK 名古屋放送局，p225
24）高階秀爾［ほか］（2013）：富士山（描かれた江戸の富士，竹内誠編）：美術年鑑社，p22
25）上垣外憲一（2009）：富士山― 聖と美の山― ：中公新書，p142
26）静岡県立美術館（2001）：描かれた東海道 = History of Paintings on Tokaido（東海道の絵画史，飯田真編）：静岡県立美術館，p5
27）静岡県立美術館（2004）：富士山の絵画（日本の山/静岡の山，村上敬編）：静岡県立美術館，p55
28）静岡県立美術館（2001）：描かれた東海道 = History of Paintings on Tokaido（東海道の絵画史，飯田真編）：静岡県立美術館，p5
29）上垣外憲一（2009）：富士山― 聖と美の山― ：中公新書，p161
30）遠藤まゆみ（2014）：三保の松原・美の世界：NPO 法人三保の松原・羽衣村，p61
31）清水市史編さん委員会（1976）：清水市史第一巻：吉川弘文館，780pp.
32）清水市史編さん委員会（1981）：清水市史第二巻：吉川弘文館，878pp.
33）清水市史編さん委員会（1986）：清水市史第三巻：吉川弘文館，1000pp.
34）衆議院会議情報：第 120 回国会 予算委員会第三分科会 第 2 号，1991. 3. 12
35）世界遺産委員会（2013）：世界遺産委員会決議，6-7
36）静岡市（2014）：三保松原保全活用計画，p15
37）静岡市（2014）：三保松原保全活用計画，p12